はしがき

日本語の使役表現は、たとえば、「母親は子供にフルーツを食べさせた」のように、動詞「食べる」の語幹「食べ」に使役を表わす助動詞「－させる」をつけて表現します。ただ、この場合、子供がフルーツを食べたくないのに、母親が強制して食べさせたのか、子供がフルーツを食べたいのを、母親が許可して食べさせたのかなどは分かりません。一方、英語では、母親が強制、説得、指示、許可など、どのようにして子供にフルーツを食べさせたかによって、使役を表わす動詞の make や get, have や let, さらに cause や persuade などが巧みに使い分けられます。みなさんは、そのような英語の使い分けを難しいと思ったりしませんか。

さらに、使役動詞 make は、次のように「強制使役」だけでなく、「自発使役」も表わします。

（1） a. My mother always **makes** me do my homework before I go out.（強制）
「母はいつも僕が遊びに行く前に宿題をさせる。」

b. I don’t like this dress, Mom. It **makes** me look fat.（自発）
「お母さん、私このドレス嫌い。太って見えるんだもの。」

（1a）では、母親が嫌がる子供に宿題を強制的にさせていますが、（1b）では、話し手が話題にしているドレスを着ると、太って見えるという事象が自然に（自発的に）生じると述べています。どうしてひとつの動詞 make が、このように「強制」と「自発」という２つの相反する概念を表わすことができるのでしょうか。

使役はさらに、次の（2a）のように他動詞を使っても表現できます。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

（2） a. The hijackers **landed** the plane in another country.

b. The hijackers **made** the plane **land** in another country.

（2a）の land は、「〈飛行機を〉着陸させる」という意味の他動詞で、ハイジャッカーが飛行機を別の国に着陸させたわけですから、使役表現です。（2b）の land は、「〈飛行機が〉着陸する」という意味の自動詞で、ここでは使役動詞の make とともに用いられています。ここで、（2a）と（2b）は同じ意味を表わすのでしょうか、それとも違っているのでしょうか。

本書は、英語の使役表現に焦点を当て、上記のようなさまざまな「謎」を解き明かそうとしたものです。「使役」と言うと、「複雑」とか「難しい」というイメージをお持ちの方が多いかもしれませんが、本書では、使役表現のメカニズムを豊富な具体例を通して分かりやすく平易に解説します。きっとみなさんは、本書をお読みになって、これまで不思議に思っていた事柄が明らかになり、これまで「常識」と思われていたことが、実は間違っていることが示されていて、使役の理解を深め、その面白さを味わってもらえることと思います。

本書は９章からなります。第１章では、make が、（1a, b）のような強制使役と自発使役を表わすだけでなく、強制か自発か明瞭でない場合も表わすことを示し、なぜひとつの動詞 make が、このような多様な意味を表わせるのかを明らかにします。第２章では、使役動詞 make が、次のように目的語と形容詞をとる場合、be のない（3a）と be のある（3b）のような文では、意味が同じかどうかを考えます。

（3） a. He **made** her more cautious.

b. He **made** her **be** more cautious.

みなさんは、（3a, b）はともに「彼は彼女をより注意深くした」という同じ意味だと思われるでしょうが、実は、両者は似ても似

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

つかぬ意味を表わすことを明らかにします。

第３章では、使役動詞 make の受身文を考えます。これまで、使役動詞 make が受身になるのは、次のように強制使役のみで、自発使役は受身にならないと言われてきました。

（4）　a.　I **am** always **made** to do my homework by my mother before I go out.（強制）（cf. 1a）

b. *I **am made** to look fat by this dress.（自発）（cf. 1b）

しかし本章では、自発使役でも受身になる場合がたくさんあることを示し、どのような場合に make 使役受身文が適格となるかを考えます。

第４章と第５章では、（2a）のように使役を他動詞で表わす場合と、（2b）のように make（や get, have, let 等）を用いて表わす場合で、どのような意味の違いがあるかを明らかにします。第６章では、persuade を用いた使役文を取り上げ、次のような文を比較します。

（5）　a.　John **made** her come to the party.

b.　John **persuaded** her to come to the party.

従来、（5b）の persuade を用いた文は、ジョンが彼女を説得して、（5a）と同様に彼女がパーティーに来たことを含意すると言われ、そのため、次の文が不適格であることが示されてきました。

（6）　*John **persuaded** her to come to the party, but she didn't（come to the party）.

しかし、本章では次のような文が適格であることを示し、これまでの persuade に関する主張が妥当でなく、（5b）は必ずしも彼女がパーティーに来たことまでは意味しないことを明らかにします。

（7）　John **persuaded** her to come to the party, but she forgot to（come to the party）.

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第７章では、let 使役文が受身になるかどうかを考えます。これまで多くの文献や辞書で、let 使役文は次のように受身にならないと言われてきました。

（8） a. *I **was let**（to）go to the concert by my parents.

b. *I **wasn't let** to pay for the drinks.（Swan 2005: 35）

しかし本章では、let も受身になることを示して、どのような場合に let 使役受身文が適格となるかを考えます。

第８章と第９章では、cause 使役文を取り上げます。これまで、cause 使役文は、主語の非意図的、無意識的な使役のみを表わすと言われてきました。しかし第８章では、cause 使役文が、実は、意図的、意識的な使役も表わすことを示します。そして、cause 使役文がどのような場合に用いられるかを、make 使役文と比較しながら明らかにします。またこれまで、cause 使役文は受身にならないと言われてきました。しかし第９章では、cause 使役受身文が実際にはかなり頻繁に使われていることを示します。そして、cause 使役受身文がどのような条件のもとで適格となるかを明らかにします。なお、使役動詞の get と have に関しては、久野・高見（2005）『謎解きの英文法—文の意味』の第６、７章で詳述していますので、合わせて参考にしていただければ幸いです。

本書ではさらに３つのコラムを設けました。コラム１では、「トンビ」と「凧」が、さほど似てもいないのに、どうして英語ではともに “kite” というのかを解説します。コラム２では、『ジーニアス英和辞典』（第４版、2006）で、「私は今日、熱がある」というのを、英語では “I have a temperature today.” とは言えないと書かれていますが、それが本当かどうか検討します。そしてまた、そもそも私達は、普通 36℃台の平熱があるのに、普段より熱が高いことを、どうして単に「熱がある」と言えるのかを解説します。コラム３では、ディズニーのアニメーション映画『アナと雪

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

の女王』の主題歌 “Let it go” と、ビートルズの有名な曲 “Let it be” が、日本語訳ではそれぞれ、「ありのままで」と「あるがままに」となっていますが、これら２つの英語表現がどのような意味なのか、そして、どうしてこのような似通った日本語訳になっているのかを解説します。参考にしていただければ幸いです。

この本を書くにあたり、多くの方にお世話になりました。特に Karen Courtenay, Nan Decker のお二人からは、本書の多くの英語表現に関して有益な指摘をたくさんいただきました。また、お二人に加え、Phillip Brown, Andrew Fitzsimons, Alison Stewart の３氏からも本書の例文に関して貴重な指摘をいただきました。さらに、くろしお出版の岡野秀夫氏には、本書の原稿を何度も通読していただき、さまざまな有益な助言をいただきました。ここに記して感謝します。

2014 年　立秋　　著　者

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

目　次

はしがき　*i*

第1章　使役動詞 make が表わす意味　*1*

- Make は「強制的に（無理やり）～させる」？　*1*
- 新たな疑問　*4*
- 強制使役の典型例とそれから少しずれるもの　*5*
- 自発使役の典型例　*9*
- 典型的強制使役でも典型的自発使役でもない例　*11*
- 使役動詞 make は何を表わすか？　*14*
- 結び　*15*

第2章　He made her more cautious. と He made her **be** more cautious. は同じ意味か？　*17*

- はじめに　*17*
- ［人間 主語 .Make.人間 目的語 .Be.C］は言語的強制使役文　*18*
- ［人間 主語 .Make.人間 目的語 .C］は 人間 主語 が意図的に人間 目的語 にもたらす魔術的状態変化を表わす　*21*
- ［人間 主語 .Make.人間 目的語 .C］には、自発使役の解釈もある　*24*
- He made her more cautious. と He made her be more cautious. は同じ意味か？　*27*

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第3章 Make 使役は「強制使役」の場合のみ受身になるのか? 31

- Make 使役の受身文 31
- 自発使役も受身になる 34
- これまでの例で気がつくこと 40
- 受身文の by 句は、「行為者」や「準行為者」、および「経験者」 41
- Make 使役受身文の by 句 46
- (6c, d)はなぜ不適格か? 50
- 適格な make 自発使役受身文は、主語指示物に生じる静的状態を表わす 51
- (1b)の適格度の説明 54
- 「準行為者」の程度 57
- 結び 61

コラム① トンビと凧 63

第4章 The man **made** him **die**. はなぜ不適格か? 69

- 『ジーニアス英和辞典』の記述 69
- O(目的語)が自分の意志でできない動詞も現われる 70
- 母語話者の判断と指摘 72
- Make X die と kill X はどこが違う? 74
- 主語が〈人間〉の場合 76
- 結び 78

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第5章 Land the plane と make the plane land はどこが違うか?
—語彙的使役と迂言的使役の意味の違い— *81*

- Land the plane か、make the plane land か? *81*
- 語彙的使役と迂言的使役の具体例と意味の違い *82*
- さらなる例 *86*
- (1a, b)の違い *88*
- 日本語の語彙的使役動詞と迂言的「—させる」使役動詞 *90*
- 結び *93*

第6章 Persuade 使役構文 *97*

- Persuade someone to-VP(動詞句)構文 *97*
- 「含意」と「暗意」 *98*
- Persuade someone to-VP 構文に関するこれまでの説明 *101*
- Persuade someone to-VP は、本当に“someone(to-)VP”を含意するか? *104*
- Coax someone to VP と Coax someone into VPing *109*
- 結び *111*

コラム② I have a temperature. は間違いか? *113*

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第7章 Let 使役文は本当に受身にならないか? 119

- 使役動詞 let とその受身形 119
- Let は本当に受身にならないか? 124
- 非意図的動詞のみ受身文になるのでは? 129
- Let 使役受身文の適格性制約 132
- 主語が〈無生物〉の場合 135
- (12e)の be let rest に関して 137
- さらなる let 使役受身文 139
- 結び 141

コラム③ “Let it go” と “Let it be” 143

第8章 Cause 使役文とその受身文(1)

— Cause 使役文は本当に意図的な使役を表わせないのか? — 151

- はじめに 151
- Make 使役文は非意図的な使役も表わす 153
- Cause 使役文は意図的な使役も表わす 155
- Cause 使役文の意味—Make 使役文と比べながら 158
- 強制使役の2つのタイプ 163
- なぜ(3a)は不適格か? 167
- 結び 168

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第9章 Cause 使役文とその受身文(2)
— Cause 使役文は本当に受身文にならないのか? — 171

● はじめに 171
● Cause 使役受身文はどんな場合に用いるか 173
● (1b),(2b)の不適格性の説明 178
● (3)-(5)の説明 182
● さらなる例の観察 185
● 結び 186

付記・参考文献 189

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

使役動詞 make が表わす意味

第1章

Make は「強制的に（無理やり）～させる」？

高校では、使役動詞 make が、他の使役動詞 get, have, let などと対比され、それぞれの違いが強調されて教えられるのが一般的です。高校生用の英文法書を数冊参考にして、それぞれの意味や用法をまとめると次のようになります。みなさんは、このように習ったのではないでしょうか。

(1)

使役動詞	意味・用法
make	（相手を）強制して無理やり～させる
get	（相手を）説得・苦労して～させる
have	立場上、相手に指示・依頼して「～させる／してもらう」のが当然な場合に用いる
let	（相手がしたいのを）許容・許可して～させる

ここで、それぞれの例をあげておきましょう。

(2) a. My mother always **makes** me do my homework before I go out.
「母はいつも僕が遊びに行く前に宿題をさせる。」

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

He made her more cautious. と He made her **be** more cautious. は同じ意味か？（【付記1】参照）

第2章

はじめに

みなさんがよくご存知のように、make には、［SVOC］（主語・動詞・目的語・補語）の用法があります。『ジーニアス英和辞典』（第4版 2006）のこの項目を見てみましょう。同辞典からの例文引用は、名詞、形容詞、過去分詞についてひとつずつとします。

> (1)　make［SVOC］＜人・物・事が＞O＜人・物・事＞をCにする《◆作為動詞；Cは名詞・形容詞・過去分詞》｜ The news made them happy. 知らせを聞いて彼らは喜んだ / Try to ~ your work a pleasure. 仕事を喜びとするようにしなさい / I couldn't ~ myself understood in English. 私の英語は通じなかった

上記の説明の中で、「作為動詞」というのは、make, elect, appoint などのように、O（目的語）をC（補語）にする行為を表わす動詞のことです。

この章のタイトルの最初の英文 He made her more cautious. は、make の［SVOC］のCが形容詞の用例です。文の意味は、『ジーニアス英和辞典』の訳語「＜人・物・事が＞O＜人・物・事＞をCにする」に従えば、「彼は彼女をより注意深くした」になります。この章のタイトルの2番目の英文 He made her **be** more cautious. は make 使役文ですから、この文も日本語にすれば、「彼は彼女をよ

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

Make 使役は「強制使役」の場合のみ受身になるのか？

第3章

Make 使役の受身文

使役動詞 make は、第１章で述べたように、一般に、「強制して無理やり～させる」という「強制使役」と、「ある事柄が原因となって、別の事柄が自発的に（自然に）生じる」という「自発使役」（第１章の（10a-e）と（11a-d）参照）の２つの意味を表わすと言われています。そして、使役動詞 make が受身文になる場合は、前者の「強制使役」のみで、「自発使役」は受身文にはならないと言われています。たとえば、次の（1）と（2）を見てみましょう（［強制使役］、［自発使役］の区別と下線は、筆者が分かりやすさのために入れたもの）。

（1）『ジーニアス英和辞典』（2006: 1185）、make の「語法」欄：
〈人・物・事が〉〈人など〉に…させる
受身では強制使役の場合のみ可能で、to が必要：
a.　I was made to go（by him）.［強制使役］
b. × The sea was made to glisten by the sun.［自発使役］
（cf. The sun made the sea glisten.）

（2）『ウィズダム英和辞典』（2013: 1165）
［make A do］
〈人などが〉A〈人など〉に（嫌がっても強制的に）…させる；

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

The man **made** him **die.** はなぜ不適格か？

第4章

● 『ジーニアス英和辞典』の記述

『ジーニアス英和辞典』（第４版、2006: 1185）の使役動詞 make の「語法」欄に次の記述があります（下線は筆者）。

> (1)「S（主語）＋ V（make）＋ O（目的語）＋ do」の do は、O が自分の意志でできる動詞に限る。
>
> * The man made him die は不可。
>
> ただし、〈物・事〉が主語の場合は可能：
>
> The accident made him die. 事故が彼の命を奪った。

(1) の記述は、「S ＋ V（make）＋ O ＋ do（動詞の原形）」パターンをとる make 使役文は、主語（S）が人間の場合、使役内容（= 被使役事象）は、被使役主（目的語の O）が自分の意志でできるものでなければならない、ということを述べています。しかし、これは本当でしょうか。

まず、(1) の記述では、主語（S）が〈人間〉か〈物・事〉（つまり、〈無生物〉）かの区別がされていますが、目的語（O）に関しては、その区別がされていません。しかし、目的語の「O が自分の意志でできる動詞に限る」ということは、無生物は自らの意志をもたず、そのため、自分の意志で何かをするということはあり得ませんから、O は〈人間〉（あるいは高等動物）であることが前提になっています。したがって (1) は、主語も目的語も〈人

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

Land the plane と make the plane land はどこが違うか？
―語彙的使役と迂言的使役の意味の違い―

第5章

Land the plane か、make the plane land か？

いきなり物騒な話で恐縮ですが、日本に向かっていた飛行機がハイジャックされ、別の国に強制着陸させられることになったと仮定しましょう。このニュースがテレビや新聞で報道されるとき、次の２つの文ではどちらが用いられるでしょうか。

（1） a. The hijackers **landed** the plane in another country.
b. The hijackers **made** the plane **land** in another country.

（1a）の land は、「〈飛行機を〉着陸させる」という意味の他動詞で、この文は他動詞文です。つまり、この他動詞 land は、「飛行機が着陸する」という事象をハイジャッカーが「引き起こした」と述べており、その点で「使役」表現です。一方（1b）の land は、「〈飛行機が〉着陸する」という意味の自動詞で、ここでは使役動詞の make とともに用いられています。前者のような他動詞は、言語学では、「語彙的使役（lexical causative）動詞」と呼ばれ、後者の make や、さらに get, have, let などは、「迂言（うげん）的使役（periphrastic causative）動詞」と呼ばれています。両者の表現はどこが違うのでしょうか（「迂言（うげん）的」とは、直接的でなく、長い言い回しをするという意味です）。

上の状況では、（1a）の語彙的使役も（1b）の make を用いた迂言的使役も、どちらも可能です。ただ、両者でその表わす意味

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

Persuade 使役構文

第6章

Persuade someone to-VP（動詞句）構文（VP は Verb Phrase の略）

次の２つの構文を比べてみましょう。

（1） a. **make** someone VP:

［例文］John **made** Mary do it.

b. **persuade** someone to-VP:

［例文］John **persuaded** Mary to do it.

（1a）は、第１章で考察した make 強制使役構文です。『ジーニアス英和辞典』（第４版、2006）では、この構文に「＜人・物・事が＞＜人など＞に～させる」という訳がつけられています。一方、（1b）には、同じ『ジーニアス英和辞典』で、「＜人が＞＜人＞を説得して～させる」という訳がつけられています。「X が Y に～させる」は使役構文ですから、この日本語訳に基づけば、（1b）も使役構文ということになります。そうすると、強制使役解釈としての例文（1a）と説得使役解釈としての例文（1b）の間には、強制か説得かの違いしかないことになります。これは本当でしょうか。

本章では、（1a）と（1b）の間には、強制か説得かの違いだけでなく、重要な違いがあることを示します。そして、（1b）のような persuade を用いた文に関してこれまで言われてきたことが、

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

Let 使役文は本当に受身にならないか？

第7章

使役動詞 let とその受身形

使役動詞の let は、次のように、［SVO ＋動詞の原形］の形をとり、「（望み通り）～させる、～することを許可する」という、「許容・許可」の意味を表わすことは、みなさんご存知でしょう。

（1） a. My parents **let** me go to the concert.
「両親は私にそのコンサートへ行かせてくれた。」
b. Some people **let** their kids do anything they like.
「親の中には、子供に何でも好き勝手をさせる人がいる。」
c. I will **let** you know more in detail by Saturday.
「土曜日までにもっと詳しいことをお知らせします。」

（1a）は、話し手がコンサートに行くことを望み、両親がそれを許可したことを表わしています。（1b）も同様です。また（1c）は、聞き手が詳細について聞きたいような状況で、話し手がそれを土曜日までに知らせましょうと述べています。

（1a-c）の目的語は、me, their kids, you で、すべて人間ですが、「許容・許可」の意味を表わす let の目的語は、次のように無生物であっても構いません。

（2） a. The chair **let this topic** be brought up for discussion.

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

Cause 使役文とその受身文（1）
― Cause 使役文は本当に意図的な使役を表わせないのか？―

第8章

● はじめに

『ジーニアス英和辞典』（第 4 版（2006）大修館書店）の cause の使役用法の項（p. 315）に次の記述があります（下線は筆者）。

> (1)　［SVO to do］〈人・事が〉〈人・事〉に…させる（原因となる）、（結果的に）…させる《◆ make や have が意識的な使役を表すのに対し、cause は偶発的・無意図的なので、deliberately, intentionally などと共に用いることはできない》‖ Her behavior caused me to laugh. 彼女のしぐさに私は笑ってしまった。

(1) の下線部の記述は、Givón（1975: 62）の次の仮説に基づいていると考えられます。

(2)　Cause 使役文は偶発的な（incidental）使役を表わし、make 使役文は意図的な（intended）使役を表わす。（【付記 1】参照）

Givón（1975: 61-62）は、この仮説を裏づけるために次の例を提示しています。

(3)　a. * John deliberately **caused** Mary to do the dishes.

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

Cause 使役文とその受身文（2）
― Cause 使役文は本当に受身文にならないのか？―

第9章

● はじめに

私たちは前章の冒頭で、使役動詞の cause が受身文にはならないという『フェイバリット英和辞典』の記述を紹介し、それが、次の cause 使役受身文の不適格性に基づく Mittwoch（1990）の説を参考にしているのではないかと述べました（前章の（5)-(8）を参照)。

（1） a. The inflation caused prices to rise.
b. * Prices **were caused** to rise（by the inflation).
「物価の上昇が（インフレによって）引き起こされた。」

（2） a. Aspirin causes body temperature to drop.
b. * Body temperature **is caused** to drop by aspirin.
「体温の低下はアスピリンによって引き起こされる。」

しかし、使役動詞の cause は、本当に受身にはならないのでしょうか。実は、グーグルで cause の使役受身文を検索してみると、おびただしい数の実例が見つかります（Hollmann（2003, 2005）も参照)。以下はその数例で、ネイティヴスピーカーにも適格との確認を得たものです（前章の（15c）も参照)。

（3） a. In a concert and sound installation, twenty mobile phones were suspended from a ceiling. **These were caused to ring**

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers